# JAC AWARD リマーカブル・プロデューサーを受賞して

AOI Pro.久松真菜

2018年リマーカブル・プロデューサーを受賞させていただきました、AOI Pro.久松真菜と申します！
今だから話せる、受賞時の本音、受賞後の変化をお話しさせていただきたいと思います。

この年にリマーカブル・プロデューサー・オブ・ザ・イヤーに輝いたのは、
私の後輩であり、同じ時代を生きる戦友である川口雅弘プロデューサー。
彼の仕事への向き合い方や、仕事ぶりを近いところで見てきていたので、
彼が受賞することは、ものすごく納得できたし、本当に心から嬉しかったです。
ただ、1位をとりたかったという悔しさ、応援に来てくれた後輩や先輩、上司に申し訳ないという思い、
女性プロデューサーとしてグランプリとりたい！この年が最後のチャンス！
などのこともあいまって、会場で、大号泣したことを鮮明に覚えています。

その時、私の師匠である山田博之プロデューサーに、「これだけがお前の評価じゃないよ」
と言われて、さらに大号泣した記憶があります。
(↓その時の写真です。会場の照明の関係でめちゃピンク！)

でも、受賞できなかったことで、プロデューサーという職業がさらに好きになったんです。

今思えば、2018年の私は「おごり」がありました。
業界を引っ張れる存在になりたい！という思いが強すぎて、
リマーカブル・プロデューサー・オブ・ザ・イヤーになって、有名になるんだ！
と、実績もないのに、鼻息荒く、この賞にぶら下がろうとしてたんですね。

入社当時から、女性プロデューサーがこの業界に少ないことに疑問を持っていました。
実際仕事していると、女性が生きづらいと思うこともあります。
だからこそ、
早くプロデューサーになって、有名になって、女性が活躍できるということを、証明したかったんですね。
でも、2018年に「オブ・ザ・イヤー」になれなかったことで、
今までの仕事のことや、お世話になった方々の言葉、先輩後輩、上司からのアドバイスなどを
振り返ることができ、今からの自分ができることに向き合うことができたんです。
そこから、自分だからこそ気づけること、発信できること、開拓できること、
たくさんのことを素直に誠実に仕事に活かしていくことができたと思います。

この賞を取れなかった2018年は、私のプロデューサー人生の中で、
プロデューサー当職業と向き合うきっかけとなった大事な年となりました。
ここから4年が経ち、どう成長したかはわかりません。
それは周りの方々に判断いただくべき事なのですが、
少しは、「おごり」がなくなって、実力がついていると信じたいです。

私を本当の意味での「プロデューサー」にしてくれた、
リマーカブル・プロデューサーという賞に、心から感謝しています。

これからも、
「プロデューサー」を育てる賞でありつづけてもらうために、微力ながら尽力したいと思います。